

**草津市中学校給食・スクールランチ（配食サービス）
調査・検討業務結果報告**

平成25年4月
草津市教育委員会

1. 中学校昼食に関する現況

(1) 中学校昼食の分類

現在、国内、県内では様々な中学校昼食のあり方があります。

全員喫食方式の完全給食とは、本市小学校で実施している学校給食のことを指します。

選択制方式のスクールランチにも、学校給食法に基づいた給食事業と学校給食法に基づかない昼食斡旋事業があります。

現在、本市の中学校で実施しているスクールランチ（教職員が利用している業者弁当を生徒に斡旋）は選択制方式のスクールランチで昼食斡旋事業となります。

表 主な中学校昼食の分類

全員喫食方式	完全給食		
	補食給食		
	ミルク給食		
選択制方式	スクールランチ	給食事業	完全給食
			補食給食
			ミルク給食
	昼食斡旋事業		
	家庭から持参	家庭弁当	
購入したパン・おにぎり			
購入した弁当			
購買			

(2) 全国の中学校昼食状況

全国では、中学校の全員喫食方式の完全給食が進んでおり、平成 22 年時点で 10,850 校中 76.9% にあたる 8,261 校で実施されています。また、その割合は年々高まっています。

給食業務の外部委託の状況は運搬業務、調理業務、食器洗浄業務でその比率が高くなっています。

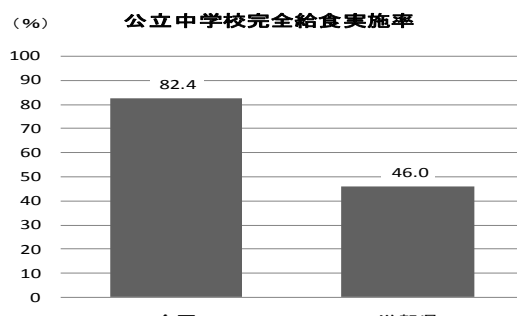
スクールランチ等の選択制方式の昼食に関する全国的な調査は実施されていませんが、大津市教育委員会スクールランチ推進室が作成した中学校昼食の実施状況に関する調査（平成 24 年 7 月）によると、全国の多くの学校でスクールランチが実施されています。

(3) 県内他市の中学校昼食状況

調査時では、滋賀県内の19自治体のうち、市内全ての中学校で全員喫食方式の完全給食を実施しているのは、野洲市、湖南市、甲賀市、高島市、米原市、竜王町の6自治体です。全国の公立中学校の8割以上で完全給食が実施されているのに対し、滋賀県での実施率は5割を切っています。

平成25年度に入り、東近江市、日野町、愛荘町、多賀町の4自治体加わり、実施率は5割に達しました。

隣接市などの状況を見ると、守山市で本市が実施しているスクールランチ（配食サービス）と同じ昼食斡旋事業によるスクールランチを実施、彦根市では昼食提供事業によるスクールランチが市内7中学校中6校で実施されています。また大津市では6月から8校において先行実施し、検証や改善を図ったうえで、25年度中に順次実施校を拡大する予定です。



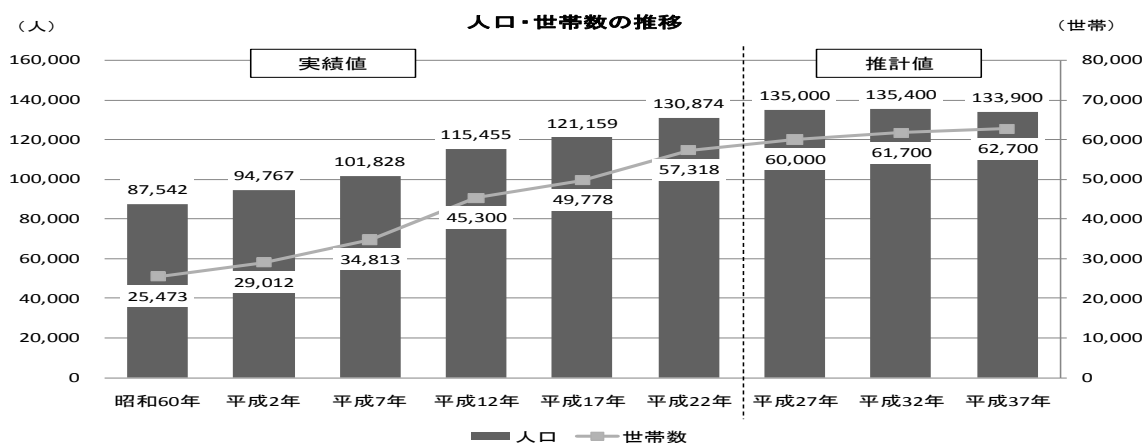
資料：学校給食実施状況等調査（平成22年度）
（文部科学省）

2. 中学校昼食検討のための本市の現況

(1) 本市の現況

1) 人口・世帯の現況

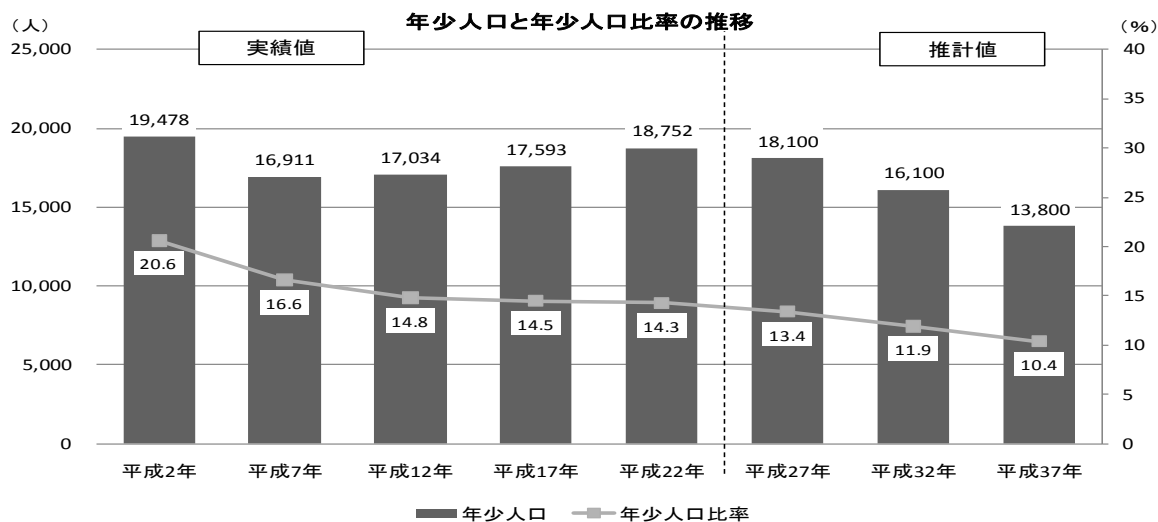
本市の人口・世帯数は平成22年度時点で増加傾向にあります。今後も、増加の割合はゆるやかになるものの、人口については平成32年時点、世帯数については平成37年時点においても増加が見込まれています。人口については平成37年時点で、減少に転じることが見込まれています。



資料：実績値/国勢調査、推計値/第5次草津市総合計画

転入・転出者数の推移をみると平成18年以降、常に転出者よりも転入者数が上回っている状況となっています。

年少（0歳～14歳）人口については、平成7年から平成22年時点まで増加傾向にありますが、今後の見込みとしては減少し、平成37年時点では平成22年時点と比較して5,000人の減少が見込まれています。



資料：実績値/国勢調査、推計値/データブック 2012

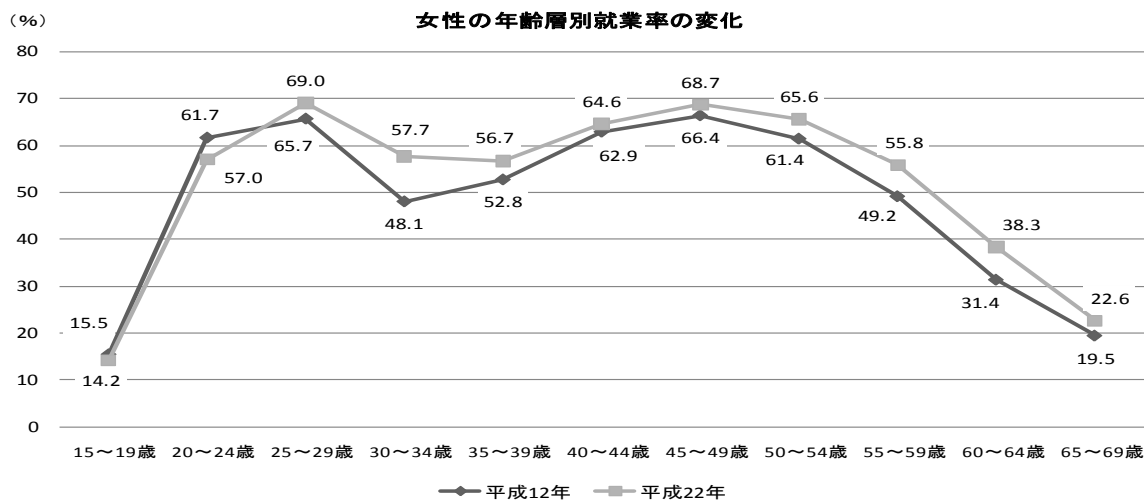
2) 小・中学校の児童数・生徒数・学級数の推移

小学校児童数、学級数の推移をみると児童数においては平成12年以降平成18年までは年間100～200人程度の増加がみられ、それ以降も微増傾向にあります。学級数においては、増加が続いており、平成15年から平成24年の10年間で48学級増加しています。

中学校生徒数、学級数の推移をみると生徒数においては平成12年以降平成16年までは減少傾向にありましたが、その後増加し、近年では3,500人程度で推移しています。学級数については近年、115学級程度で推移しています。

3) 女性の就業率

女性の就業率の変化を平成12年と平成22年時点で比較すると、15～19歳、20～24歳を除く全ての年齢層で就業率が高くなっています。働く女性が増加していることがわかります。



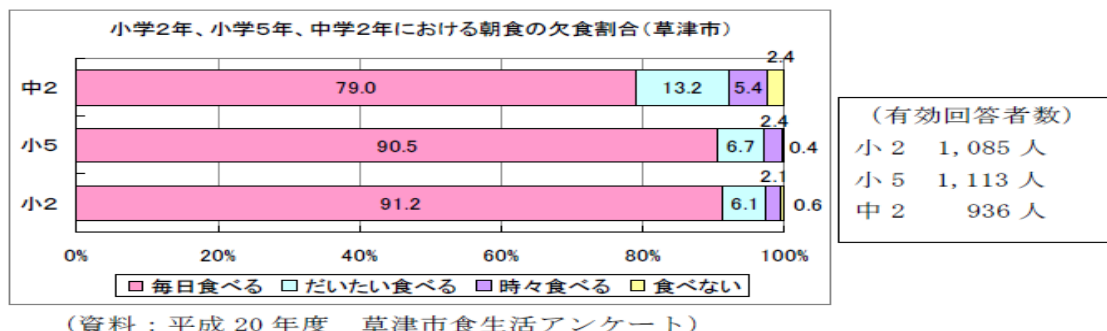
資料：国勢調査

就業率＝就業者/総数

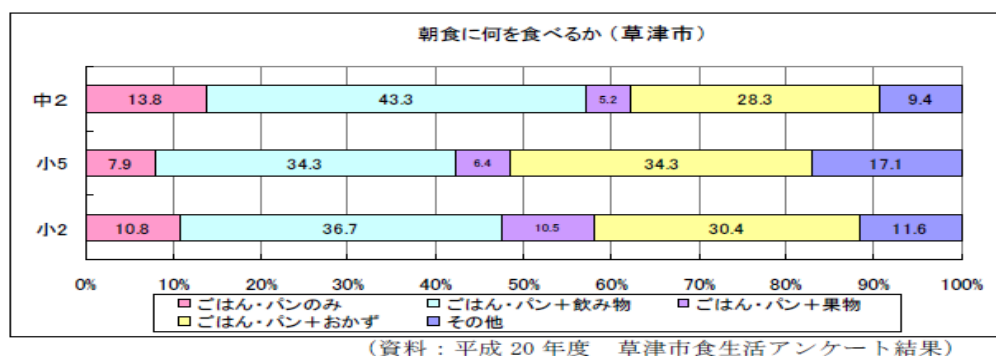
就業者には、就業の状態として「主に仕事」、「家事のかたわら仕事」「通勤のかたわら仕事」「休業者」を含みます。

(2) 本市の児童・生徒の食生活について

小学2年生では朝食を「毎日食べる」と9割以上で回答しているのに対し、中学2年生では「毎日食べる」という回答が8割以下となっています。朝食を「食べない」と回答している割合も小学2年生では0.6%とほとんどいないのに対し、中学2年生では2.4%となっています。学年が上がるにつれて朝食欠食の傾向が見られます。

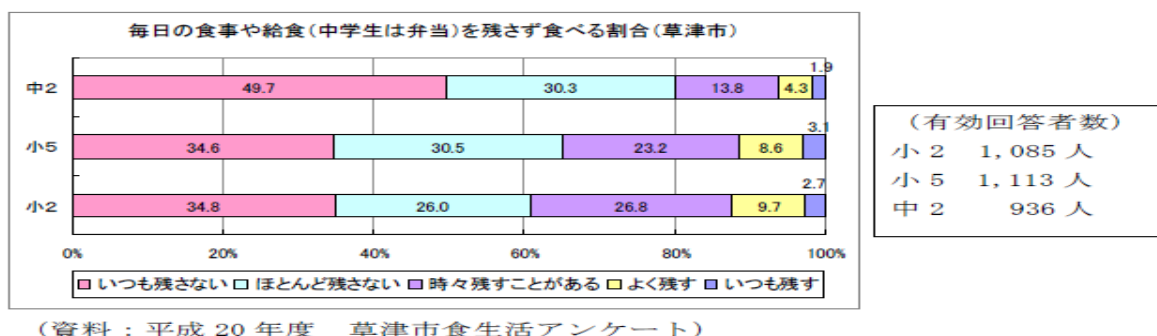


朝食の内容としてはどの学年においても、「ごはん、パン+飲み物」の形態が最も多く、続いて「ごはん、パン+おかず」となっています。中学2年生において、「ごはん・パンのみ」という回答が他の学年よりも多くなっています。



(有効回答者数)	小学2年生	小学5年生	中学2年生
	1,085人	1,113人	936人

毎日の食事や給食(中学生は弁当)を残さず食べる割合について、小学2年生では、「いつも残さない」という回答が3割程度であったのに対し、中学2年生では5割に上っています。「時々残すことがある」「よく残す」「いつも残す」を合わせた割合も小学2年生では、4割ほどであるのに対し、中学2年生では2割ほどとなっています。学年が上がるにつれて、毎日の食事や給食(中学生は弁当)を残さず食べる割合が増加する傾向が見られます。



(3) 本市のこれまでの中学校昼食について

1) 中学校昼食のあり方の変遷

本市では、昭和 48 年度から昭和 60 年度まで中学校においても全員喫食方式の完全給食を実施していましたが、次の理由で、昭和 60 年度に廃止しています。

【全員喫食方式の完全給食の廃止理由】

- ・ 児童生徒が増え、給食センターの処理能力に限界が生じた
- ・ 給食の献立に中学生がなじめず、残菜が多くなった
- ・ 給食準備や後片付けに時間がかかり、日課に支障が生じた
- ・ 給食に対する感謝の気持ちが薄れ、給食にいたずらをするような行為が見え始めた
- ・ 行財政改革において「中学校給食の廃止」が提言された 等

その後、生徒の健康保持を考慮し、4 年間は牛乳のみの給食（ミルク給食）を実施しました。しかし、弁当と牛乳がなじまなかったり、牛乳パックで遊ぶ生徒が出てきたりといった状況が生まれ、平成 2 年度には完全に給食を廃止しています。廃止当時のアンケートでは、68%の生徒が給食の廃止に賛成しています。

その後、中学校の昼食制度が家庭弁当持参制に移行して 20 数年が経過した平成 20 年度に、社会情勢の変化などを背景に、草津市中学校スクールランチ検討委員会を設置し、スクールランチ制度の検討が実施されました。その結果、平成 22 年度から現行のスクールランチが家庭弁当持参制を補完するものとして開始されました。

【中学校昼食のあり方の変遷】

昭和 48（1973）年度 学校給食スタート

昭和 60（1985）年度 完全給食廃止、ミルク給食・家庭弁当持参制スタート

平成 2（1990）年度 ミルク給食廃止、家庭弁当持参制継続

平成 22（2010）年度 家庭弁当持参制と併用でスクールランチスタート

2) 草津市中学校スクールランチ検討委員会の検討結果（平成 20 年度）

食の安全性や栄養バランスを確保する点から、専門業者による弁当を選べるシステムを整備してはどうかなどの問題提起から、平成 20 年 6 月から平成 21 年 3 月までの間、4 回にわたり草津市中学校スクールランチ検討委員会を開催しスクールランチの調査検討を実施しました。調査の結果、現状の家庭弁当持参制を中心とした方法を継続するのがふさわしいという結論に至り提言をまとめました。

【調査結果】

- ・ 家庭弁当を持参にくい生徒は全市で 28 人（調査時点）であり、業者弁当に対して一定のニーズはあるが、業者の 1 校当たり 1 日 30 食の最低販売個数に届かない数である。
- ・ 家庭弁当を持参できない生徒への対応については、教職員がパン等を購入するというスタイルが定着している。
- ・ 本市が想定するスクールランチを実施できる業者がない。（業者の採算ベースにあわない）

【結論】

スクールランチのニーズは多少あるが、家庭弁当のもつ教育的役割は大きく、費用対効果からもスクールランチ導入は切実な状況ではない。また、業者の最低販売個数に達するほどの需要が見込まれない。以上から現状の家庭弁当を中心とした方法を続ける方が好ましい。

【提言】

家庭で中学生に弁当を作る習慣は、親子の間に様々な会話を引き出す。学校の様子や友だち関係、生活習慣やしつけに関わる話、食のあり方など、弁当を通して親子の会話はどこまでも広がる。

「明日は見ばえのいいお弁当にしてね。」「何か特別の日なの。」

「帰ったらすぐに弁当箱を出しなさい。出さないなら自分で洗いなさい。」

「今日のご飯を残しているけど、具合でも悪いの。」

「今日のお弁当はおいしかったよ。またあれ作ってね。」

「もっと肉を入れてほしいな。」「野菜も食べないと体に悪いよ。」

「Aさんのお母さんが入院してお弁当が作れないんだって。」「二つ作ってあげようか。」

「ごめん、今日は体調が悪くて起きられなかった。」「自分で弁当作ったからいいよ。」

草津市の中学生は、毎日毎日家庭でこうした会話を交わしている。こうした親子のコミュニケーションは、家庭教育の根幹である。一般的には、中学生になると親子の会話が少なくなり、それが大きな家庭教育の課題になっている傾向があるが、本市では家庭弁当持参制が親子のコミュニケーションを豊かにしている。

弁当をつくる必要から家庭の食生活への保護者や生徒の関心が深まり、朝早くから弁当の準備をすることで、「早起き・朝ごはん」の習慣化が図られている側面もある。「寒い日も暑い日も朝早くから起きて作ってくれた弁当。愛情がいっぱい詰まった弁当は、ぼくの楽しみでした。」という卒業式の答辞があったり、親とけんかして登校した日に、弁当を見てけんかしたことを反省したりするというエピソードも報告されている。さらに、給食の際には多く見られた残菜が、弁当ではほとんど見られない実態もある。

学校給食制やスクールランチ制は、保護者の負担軽減や昼食提供の合理化という面では利点があるが、親子のコミュニケーションの深化や生活習慣向上への課題意識の育成という面では家庭弁当持参制の方に利点がある。本市の中学校では、20数年にわたり家庭弁当持参制を実施してきており、都市化が進む中であって各家庭で親子の豊かなコミュニケーションや絆が大事にされていることは、特筆すべきである。

確かに家庭弁当を毎日用意することは、保護者にとって時間的な手間や子どもへの配慮や指導の必要など、面倒も多い。しかし、それこそ、家庭教育に不可欠の労苦といえる。しかも、家庭事情があつて弁当が持参しにくいケースがあつても、何とか弁当を持参しようと各家庭が努力しており、実際に持参できないケースは極めて少ないという事実は、本市にあつて家庭弁当持参制のよさが広く理解され、定着していることを示している。

従って、本市にあつては、家庭弁当持参制のよさを生かして、家庭における親子のコミュニケーションを深め、それを基盤にしたよりよい家庭文化の形成を図ることがよいのではないかと考える。中学校と家庭が協力して、さらに工夫改善をしながら、家庭弁当持参制でよりよい家庭文化の形成と家庭教育の充実に取り組んではどうであろうか。

その上で、「中学校の保護者に対して、献立レシピや中学生に必要な栄養情報等を提供する。」「家庭や地域と連携して、学校の食育を充実し、生徒自身が食に関する興味・関心を高め、正しい食事の在り方や望ましい食習慣を身につけられるよう、より一層の取り組みを推進する。」ことを期待する。

資料：草津市中学校スクールランチの検討に関する報告書

3) 本市の現行のスクールランチ制度

草津市中学校スクールランチ検討委員会の結果を踏まえ、家庭弁当持参制を補完するために、平成22年度から、現行のスクールランチ（配食サービス）を導入しました。

現在、スクールランチは、教職員が利用している業者弁当を保護者からの申し込みにより生徒に斡旋する仕組みとなっています。

現行のスクールランチは、弁当を持参しにくい生徒への支援を目的に開始しましたが、家庭弁当を持参しにくい生徒の数は、平成20年では28人、平成23年では15人、平成24年では50人となっています。

資料 保護者向けのスクールランチ案内文

1. 中学校の昼食は、従来どおり家庭弁当を持参させてください。
2. 家庭の事情により弁当を持参できない場合は、それに代わるものを購入して登校させてください。
3. 入院等の特別な理由により、どうしても上記の対応ができない日に限り、教職員が利用している弁当業者の弁当の斡旋を行い、スクールランチとして利用できるようにしますので、前日までに学校（教頭）に御連絡ください。

表 スクールランチの利用状況

項目	状況
利用者数	平成22年度：2件のべ3回 平成23年度：4件のべ20回 平成24年度：8件のべ88回
利用理由	大半が「家族が病気である」ため 平成24年度の内、 1件のべ61回は、母の出産（産前産後）の関係

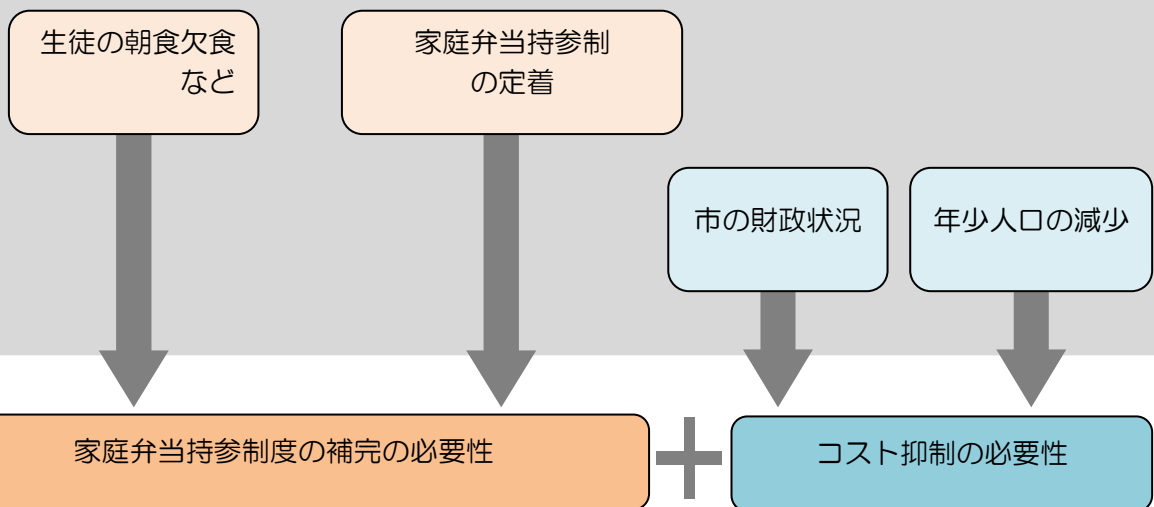
(4) 本市の現況を踏まえた中学校昼食の方向性について

社会経済情勢の変化に伴い、生徒の中には朝食欠食や、朝食を食べていても育ち盛りの身体にふさわしいとは言えない内容（メニュー）の生徒が若干います。これらの問題により、家庭弁当持参制を補完する制度は必要であると考えられます。

現在、すでに家庭弁当を持参できない場合に教職員用の業者弁当を斡旋するスクールランチ（配食サービス）が実施されていますが、そこで供される弁当は、成人向けに作られており、中学生の昼食に適しているとは言えません。また利用率が非常に低いことから、現行のスクールランチは家庭弁当持参制を補完していると言いきい状況です。

本市の中学校昼食のあり方を検討するにあたり、財源確保の問題や、今後、児童・生徒数が減少することなどから、当面は、学校給食法に基づいた給食事業へ移行するのではなく、家庭弁当持参制を継続するなかで、それを補完する現行のスクールランチ（配食サービス）を、家庭弁当持参制を補完する制度として、充実させることが適切かつ現実的な方法であると考えられます。

背景



中学校昼食の方向性

当面は、現行のスクールランチの充実

3. アンケート調査の結果

(1) 調査結果

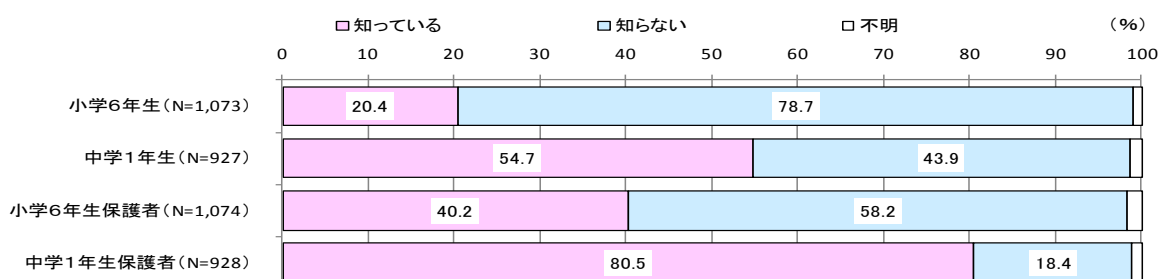
1) 現行のスクールランチについて

①現行のスクールランチの認知度（児童・生徒、保護者）

現行のスクールランチの認知が十分に進んでいません。

小学6年生では、8割程度の児童がスクールランチを認知しておらず、中学1年生においても、4割以上の生徒がスクールランチを認知していません。小学6年生の保護者では、6割程度が認知しておらず、中学1年生の保護者でも、認知しているのは8割に留まっています。

図 現行のスクールランチの認知度(児童・生徒、保護者)

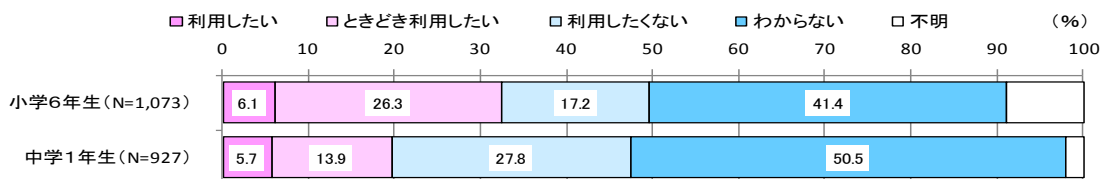


②現行のスクールランチの利用意向（児童・生徒）

小学6年生よりも中学1年生の方がスクールランチの利用意向が低くなっています。

小学6年生では、スクールランチを「利用したい」「ときどき利用したい」の合計が3割を超えるのに対し、中学1年生では2割程度と低くなっています。

図 スクールランチの利用意向(児童・生徒)



③現行のスクールランチの利用が少ない理由（保護者、教職員）

保護者は、「家庭弁当を毎日つくっているから」、スクールランチ制度の「注文や支払い方法が面倒だから」と回答しています。またスクールランチはよほどの理由がない限り使わない、使えないという意見もあります。

教職員は、「家庭弁当持参制が定着」していることを理由としています。

中学1年生保護者の回答では、「家庭弁当を毎日作っているから」が最も多く7割程度、次いで「注文や支払い方法が面倒だから」が4割を超えています。また、他の設問のその他欄への書き込みから「よほどの理由（保護者の入院等）がない限り、スクールランチは利用しないもの」という

意見もあり、そのこともスクールランチの利用が少ない一因であると考えられます。

また、教職員の間では、スクールランチの利用が少ない理由として最も多いのが「家庭弁当持参制が定着しているから」、続いて「積極的な利用を促していないから」という回答になっています。

図 スクールランチの利用が少ない理由(保護者)

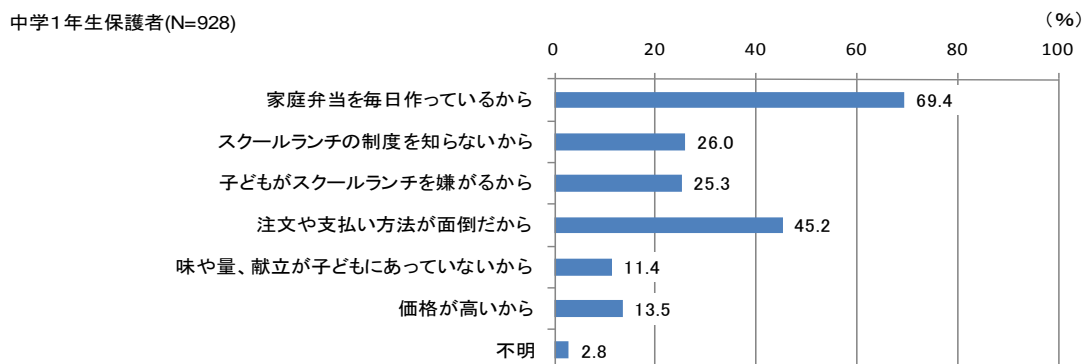
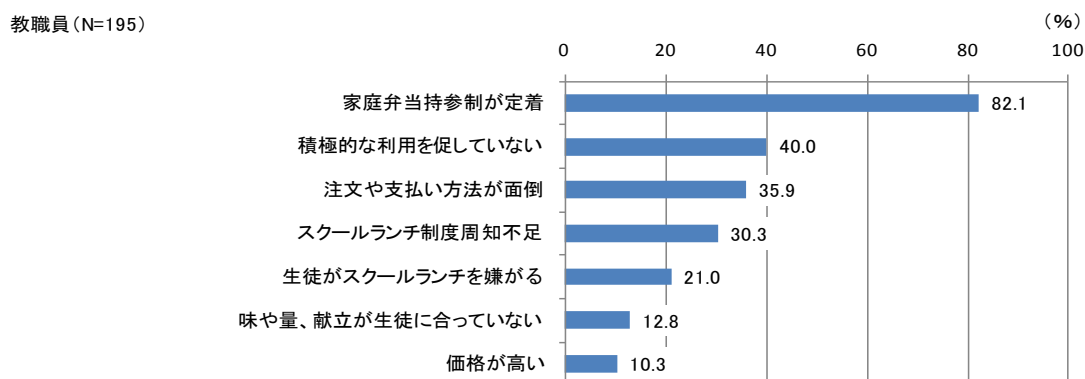


図 スクールランチの利用が少ない理由(教職員)



【現行のスクールランチについてのまとめ】

現行のスクールランチは、生徒・児童、保護者のいずれにおいても十分に認知されていません。その他の利用が少ない理由としては、家庭弁当持参制度が定着していること、現行のスクールランチの注文・支払い制度などが面倒であること、よほどの理由がないと利用できないという保護者の意見、教職員が積極的に利用を促していないことがあげられています。

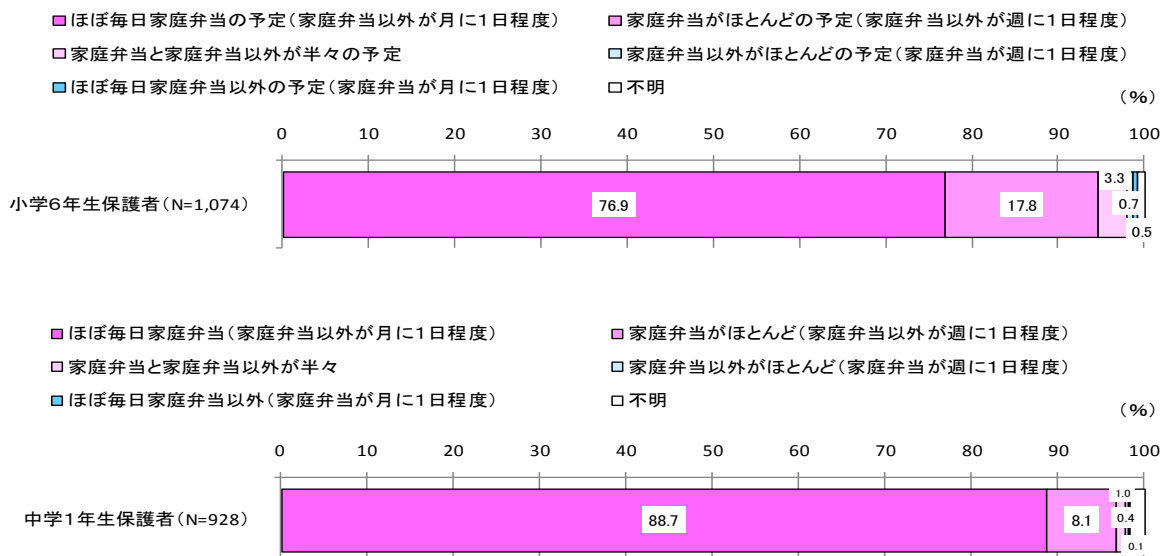
2) 中学校昼食の実態と予定

①中学校昼食の実態と予定（保護者）

家庭弁当を持参することが定着しています。

小学6年生の保護者では「ほぼ毎日家庭弁当の予定」「家庭弁当がほとんどの予定」という回答が9割以上となっています。中学1年生の保護者も「ほぼ毎日家庭弁当」「家庭弁当がほとんど」という回答が9割以上となっています。

図 中学校昼食の実態と予定(保護者)

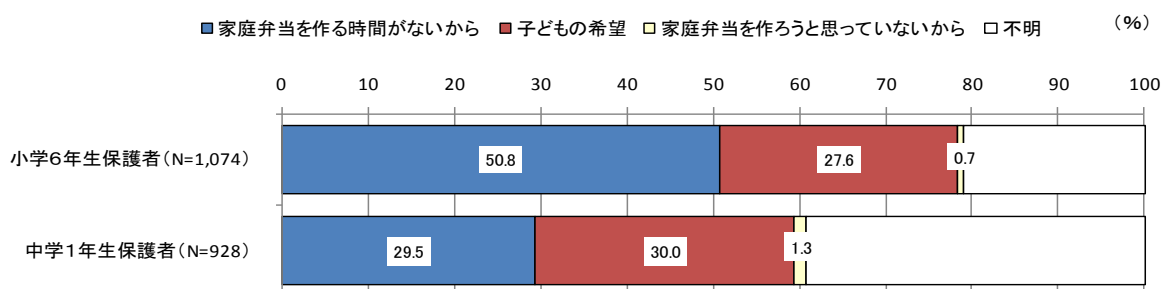


②家庭弁当以外になる理由（保護者）

「家庭弁当を作る時間がないから」「子どもの希望」により家庭弁当以外の昼食となります。

小学6年生の保護者では「家庭弁当を作る時間がないから」が5割、「子どもの希望」が3割程度となっています。中学1年生の保護者では「家庭弁当を作る時間がないから」「子どもの希望」という回答がともに3割程度となっています。

図 家庭弁当以外になる理由(保護者)

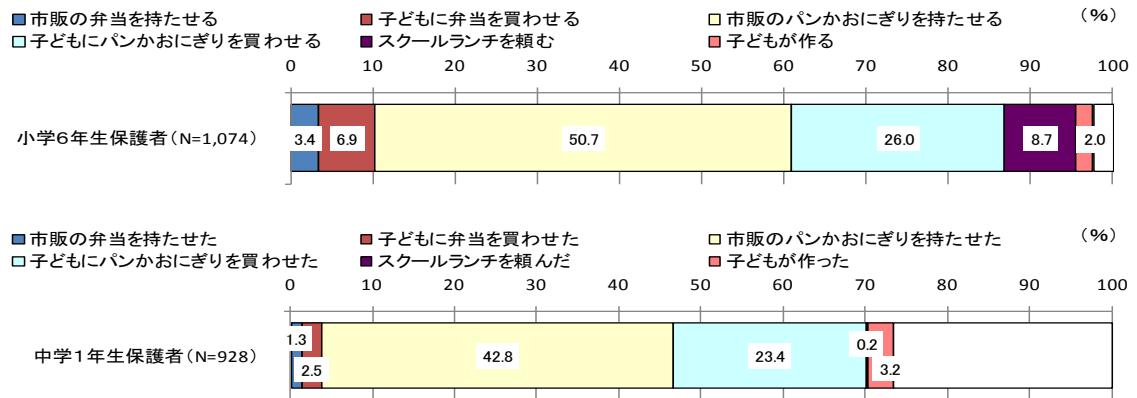


③家庭弁当以外になる場合の対応（保護者）

7割程度が「市販のパンかおにぎり」と回答されています。

小学6年生の保護者では「市販のパンかおにぎりを持たせる」が5割、「子どもに市販のパンかおにぎりを買わせる」が3割程度となっています。中学1年生の保護者では「市販のパンかおにぎりを持たせた」が4割程度、「子どもに市販のパンかおにぎりを買わせた」が2割程度となっています。

図 家庭弁当以外になる場合の対応(保護者)

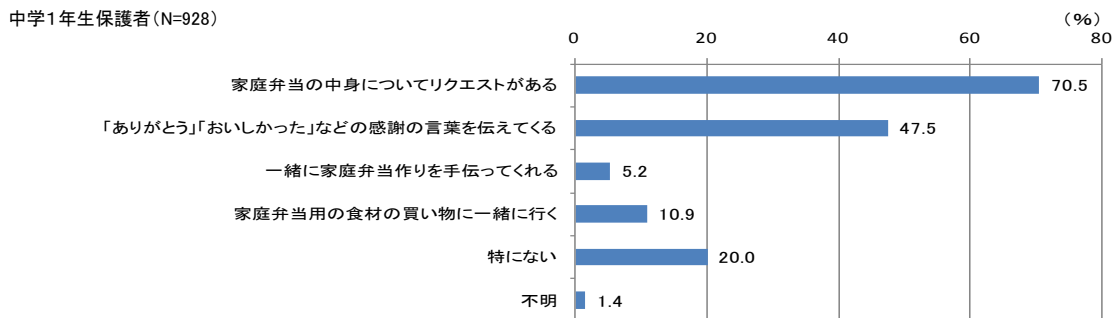


④家庭弁当でのコミュニケーションについて（保護者）

作り手とのコミュニケーションが発生しています。

「家庭弁当の中身についてリクエストがある」が7割、「ありがとう」「おいしかった」などの感謝の言葉を伝えてくる」が5割程度です。「特にない」という回答も2割あります。

図 家庭弁当でのコミュニケーションについて(保護者)

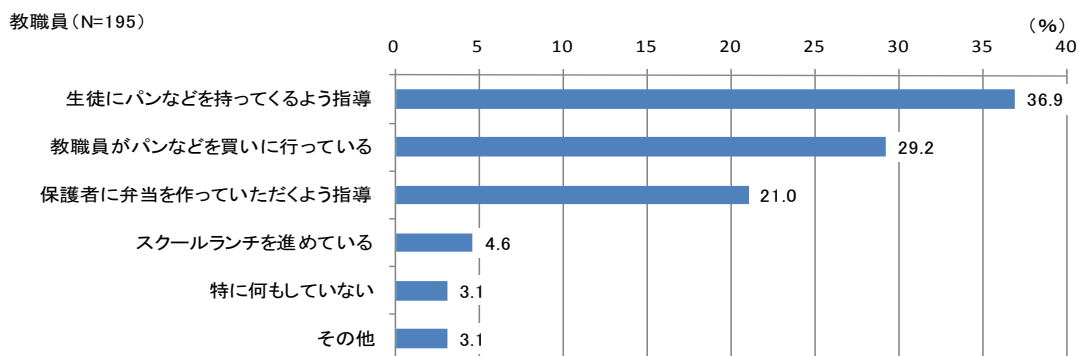


⑤家庭弁当を持参しにくい生徒への対応（教職員）

「生徒にパンなどを持ってくるように指導している」、「教職員がパンなどを買いに行っている」などの対応が行われています。

家庭弁当を持参しにくい生徒への対応として、「生徒にパンなどを持ってくるように指導している」が4割程度で最も多く、続いて「教職員がパンなどを買いに行っている」が3割程度という回答になっています。「特に何もしていない」と回答した教職員には対応を必要とする生徒がいないことが確認されています。なお、本市全体で家庭弁当を持参しにくい生徒は50人です。

図 家庭弁当を持参しにくい生徒への対応について(教職員)



⑥給食を残したか、残した理由(生徒)

4割で「ときどき残したことがあった」「いつも残していた」と回答しており、その理由は「きれいなものだったから」「量が多かったから」となっています。

「ときどき残したことがあった」「いつも残していた」を合わせると4割程度であり、その理由は「きれいなものだったから」「量が多かったから」の順となっています。

図 給食を残した・残さなかった(生徒)

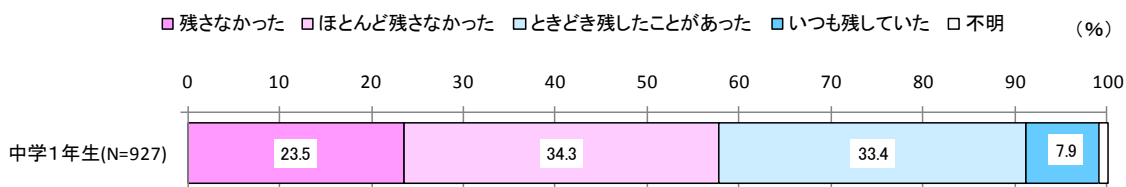
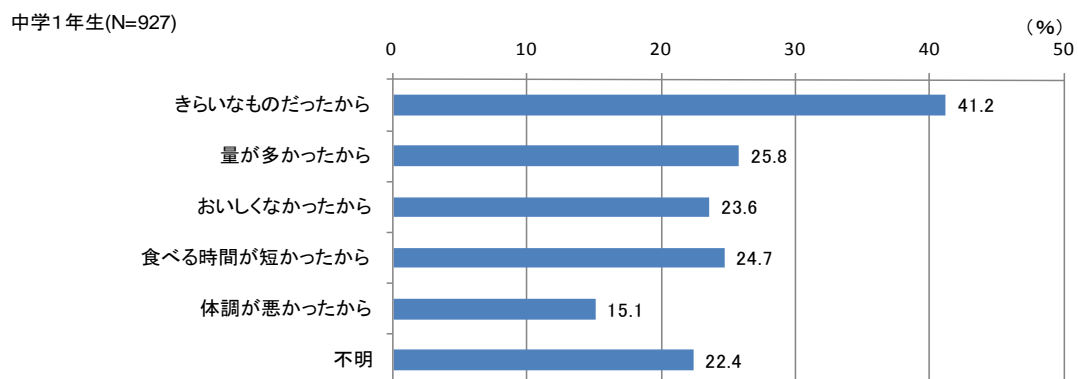


図 給食を残した理由(生徒)



⑦家の弁当を残すか、残す理由（生徒）

「ときどき残す」「いつも残している」を合わせても2割に満たず、またその理由は「食べる時間が短かったから」「量が多かったから」となっています。

「ときどき残すことがある」「いつも残している」を合わせても2割に満たず、その理由としては多い順に「食べる時間が短かったから」「量が多かったから」となっています。

図 家の弁当を残す・残さない(生徒)

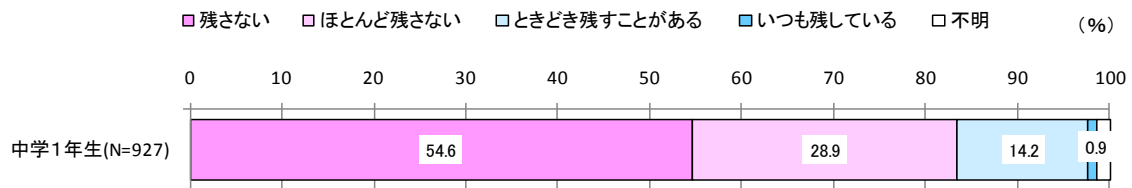
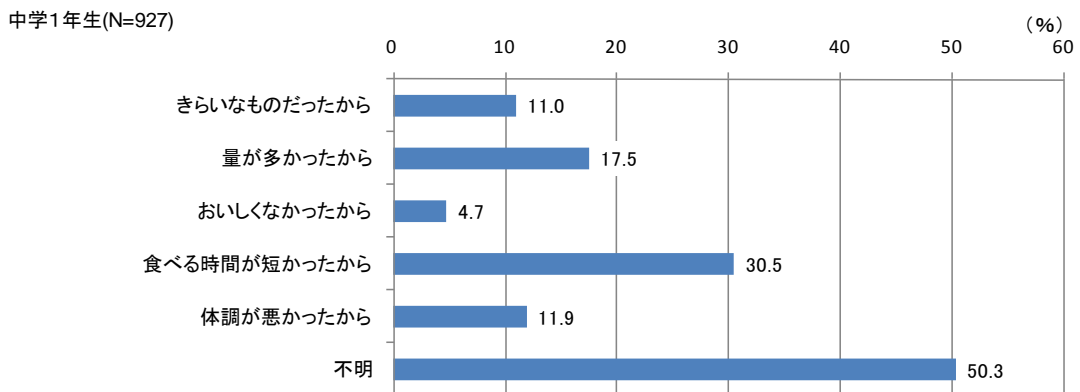


図 家の弁当を残した理由(生徒)



【中学校屋食の実態と予定についてのまとめ】

家庭弁当持参制度は定着しており、ほとんどの生徒で家庭弁当が基本となっており、それにより作り手と生徒の間にコミュニケーションも発生しています。その一方で、作り手に時間がない時や子どもの希望により家庭弁当以外となる場合の主な対応は「市販のパンやおにぎり」を購入することであり、成長期の中学生に適した屋食のあり方とは言いにくい状況です。

児童・生徒の実態としては給食よりも家庭弁当のほうが残す生徒が少ない状況です。

なお、家庭弁当を持参しにくい生徒に対しては教職員により「生徒にパンなどを持ってくるように指導している」、「教職員がパンなどを買いに行っている」などの対応が行われています。

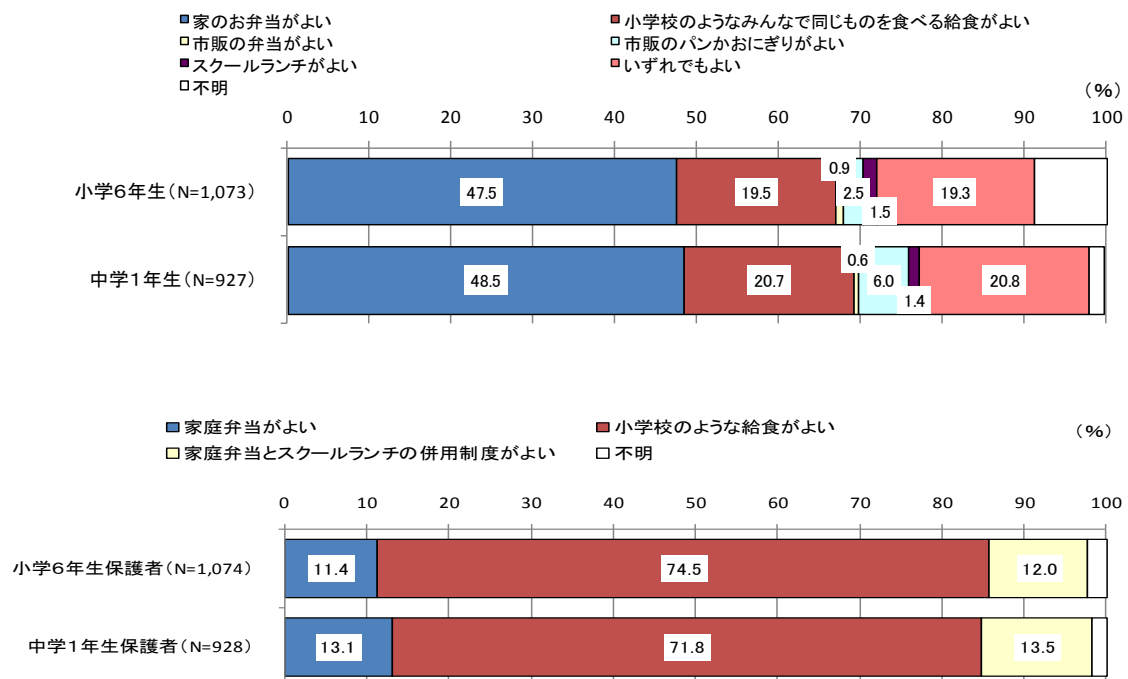
3) 中学校昼食のあり方についての希望

①希望する中学校昼食のあり方（児童・生徒、保護者）

児童・生徒は「家のお弁当がよい」が5割程度、「小学校のようなみんなで同じものを食べる給食がよい」が2割程度となっています。保護者は7割以上で「小学校のような給食がよい」と回答しています。

小学6年生、中学1年生ともに「家の弁当がよい」が5割程度、「小学校のようなみんなで同じものを食べる給食がよい」が2割程度となっています。小学6年生の保護者、中学1年生の保護者のいずれにおいても「小学校のような給食がよい」が7割以上です。

図 希望する中学校での昼食制度(児童・生徒、保護者)



②希望する理由（児童・生徒、保護者）

児童・生徒が家のお弁当を希望する理由は「お弁当の方がおいしいから」、「メニューや量が調整できるから」です。保護者が小学校のような給食を希望する理由は「栄養のバランスがとれるから」、「家庭弁当作りの負担が軽減されるから」です。

家のお弁当を希望する理由は、小学6年生、中学1年生いずれにおいても「お弁当の方がおいしいから」「メニューや量が調整できるから」の順に多くなっています。その他欄には、いずれも「好きなものが食べられるから」「愛情が感じられるから」という回答が目立ちました。

小学校のような給食を希望する理由は、小学6年生の保護者、中学1年生の保護者いずれにおいても「栄養のバランスがとれるから」「家庭弁当作りの負担が軽減されるから」の順に多くなっています。一方「経済的だから」「みんなで一緒に食べられるから」といった回答は多くありません。その他欄にはいずれも「温かいものが食べさせられるから」「弁当は夏場の食中毒が心配」などの回答が目立ちました。

図 家の弁当を希望する理由(児童・生徒)

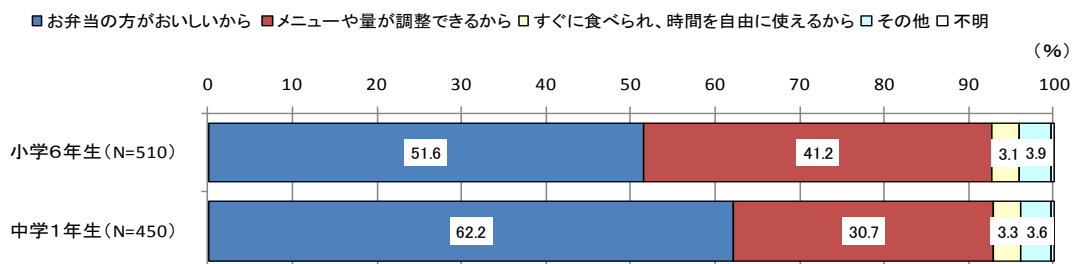
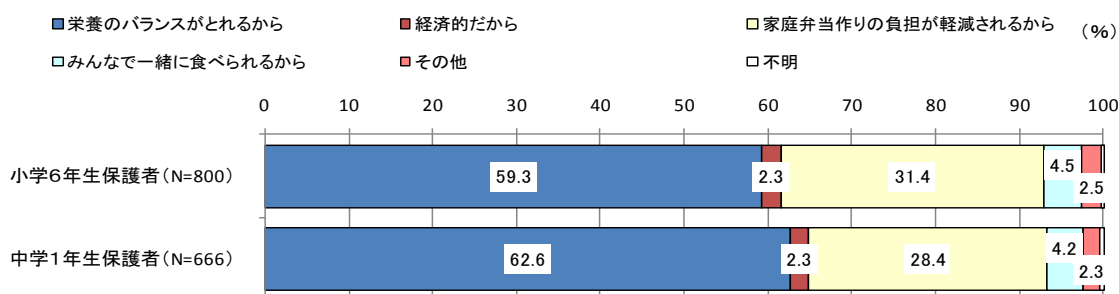


図 給食を希望する理由(保護者)



【中学校昼食のあり方についての希望についてのまとめ】

児童・生徒は、家庭弁当を希望する割合が最も多く、その理由は「お弁当のほうがおいしいから」「メニューや量を調整できるから」「好きなものが食べられるから」となっています。

保護者は、小学校のような給食を希望する割合が最も多く、その理由は「栄養バランス」や「家庭弁当作りの負担軽減」となっています。

4) スクールランチの充実について

①スクールランチの改善の方向性(保護者、教職員)

保護者では「安価であること」、「注文や支払いなどが簡単に行えること」が求められています。教職員では「注文や支払いが簡単であること」、「安価であること」がポイントだと考えられています。

小学6年生の保護者では「安価である」、「注文や支払いなどが簡単に行える」「温かくておいしいこと」の順、中学1年生の保護者では「注文や支払いなどが簡単に行える」「安価である」、「メニューの選択ができる」の順となっています。その他欄には「当日の朝に注文ができること」「特別な理由がなくても気軽に頼めること」などが目立ちました。

教職員ではスクールランチ制度改善の重要ポイントとして、「注文や支払いが簡単であること」が最も多く、続いて「安価であること」という回答になっています。その他の意見として「現状で良い」「教職員を介さないこと」という意見が多く、「注文してよいという意識を保護者が持つこと」「子どもが周りを気にせずに頼めること」という意見もありました。

図 スクールランチの改善(保護者)

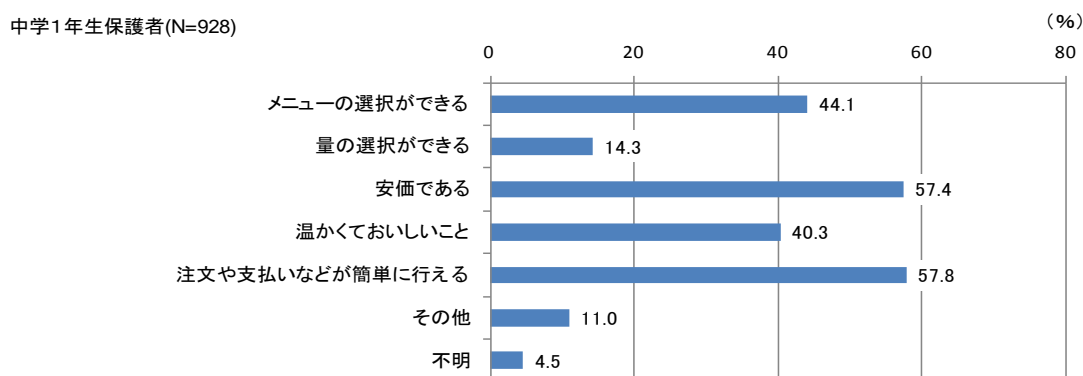
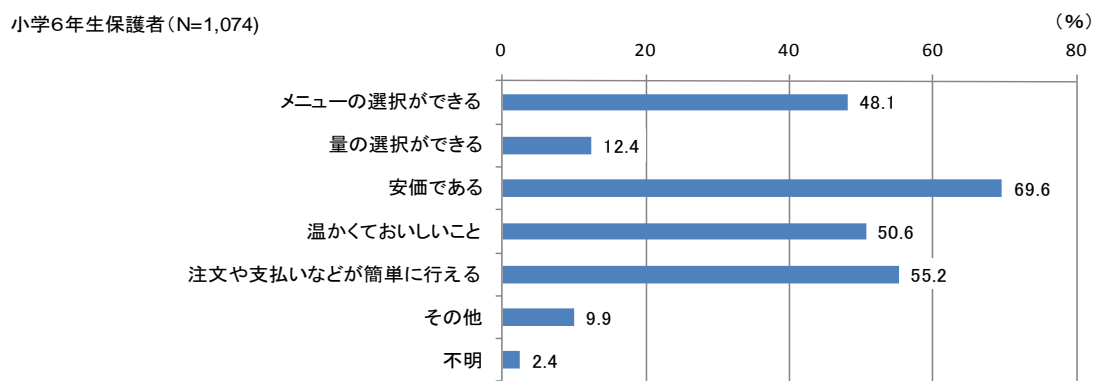
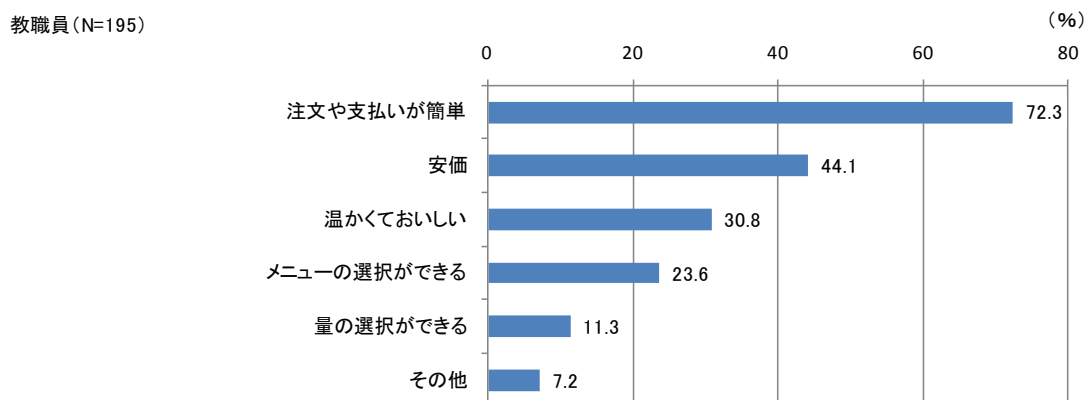


図 スクールランチ制度改善の重要ポイントについて(教職員)

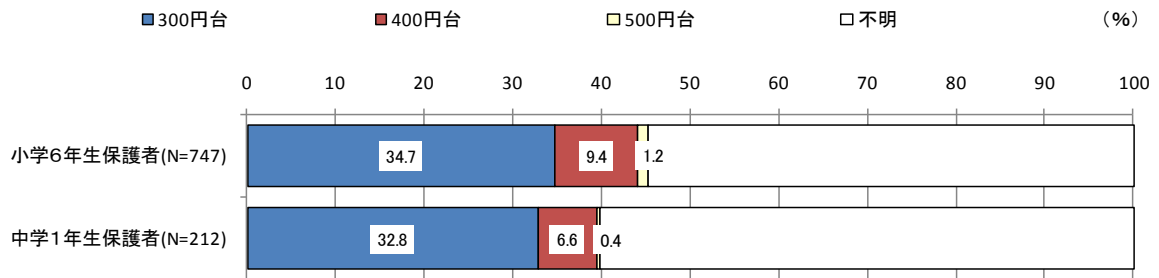


②スクールランチの価格（保護者）

300円台が利用しやすい価格とされています。

300円台が最も多く、続いて400円台、500円台となっています。

図 負担可能額(保護者)

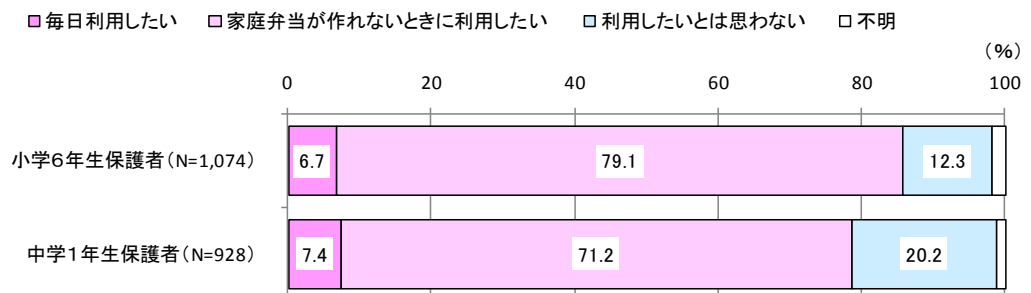


③充実したスクールランチの利用意向（保護者）

保護者の8割程度が利用意向を示されています。

小学6年生の保護者では「毎日利用したい」、「家庭弁当が作れないときに利用したい」を合わせると8割以上、中学1年生の保護者では「毎日利用したい」、「家庭弁当が作れないときに利用したい」を合わせると8割程度となっており、潜在需要が見込まれます。

図 充実したスクールランチの利用意向(保護者)



④スクールランチを利用したいと思わない理由、導入にあたって心配されること

(保護者、教職員)

保護者では、「子どもに家庭弁当を持たせてやりたいと思っているから」が理由です。教職員においては、「支払いに関して問題が起こる」、「教師の業務が増える」が心配されています。

小学6年生の保護者では「子どもに家庭弁当を持たせてやりたいと思っているから」が4割、「子どもがスクールランチを嫌がると思うから」が3割程度となっています。中学1年生の保護者では「子どもに家庭弁当を持たせてやりたいと思っているから」が6割程度、「子どもがスクールランチを嫌がると思うから」が2割程度となっています。

教職員では、仮に家庭弁当持参制を原則としない場合、心配されることとして、「支払いに関して問題が起こる」が9割近くで最も多く、続いて「教職員の業務が増える」が5割以上という回答になっています。

図 スクールランチを利用したいと思わない理由(保護者)

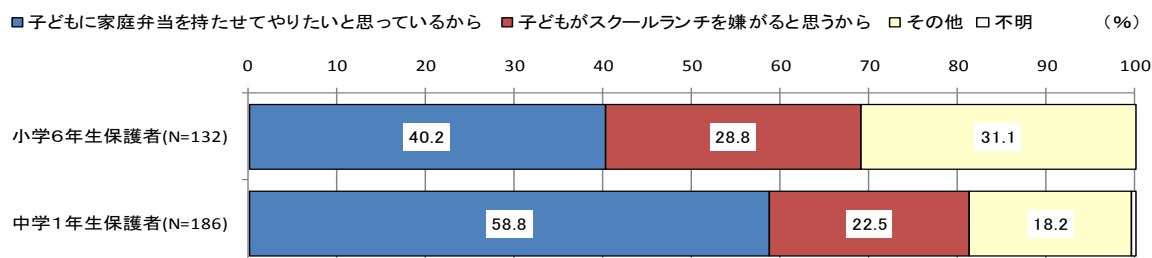
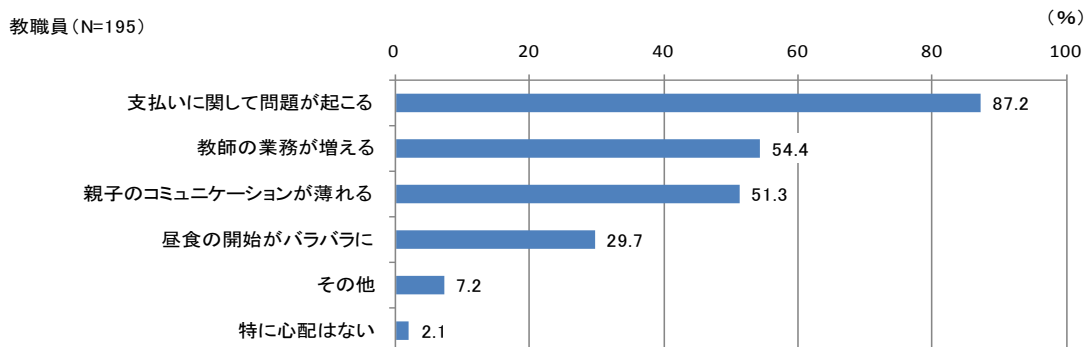


図 仮に家庭弁当持参を原則としなかった場合、心配されること(教職員)



【スクールランチの充実についてのまとめ】

保護者は現行のスクールランチの改善の方向性として、安価であることと注文や支払いなどが簡単に行えることなどが求められており、そのような方向性に改善された場合、8割程度が利用意向を示しています。その一方で家庭弁当を持たせてやりたいという思いから、スクールランチの利用を希望しない保護者もみられます。

家庭弁当持参制を原則としない場合、代金の支払いや受発注業務に新たな課題が生じ、学校運営に支障が生じない方法を十分に検討する必要があるという意見があります。

(2) アンケート結果のまとめと課題の整理

アンケート結果を項目ごとにまとめたところ、家庭弁当持参制度が定着していることや家庭におけるコミュニケーションにもなっていることなどから、当面は、スクールランチは補完的な制度に留め、整理した5つの課題を解決できるように、現行のスクールランチを充実させていくことが必要だと考えられます。

項目	アンケート結果のまとめと課題	課題の整理
1) 現行のスクールランチについて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現行のスクールランチは、生徒・児童、保護者のいずれにおいても十分に認知されていない。⇒周知方法の改善 ・ 利用が少ない理由は、認知されていないこと、家庭弁当持参制度が定着していること、現行のスクールランチの注文・支払い制度などが面倒であることなどがあげられています。⇒周知方法の改善、利用しやすい制度 ・ 現行のスクールランチが中学生に受け入れられていない。⇒献立の充実 	<p>1. 周知方法の改善</p> <p>児童・生徒、保護者がスクールランチを認知するように周知方法を改善する。</p>
2) 中学校昼食の実態と予定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭弁当持参制度は定着している。⇒スクールランチは補完的な制度に留める ・ 家庭弁当を介した作り手と生徒の間にコミュニケーションが発生している。 ⇒スクールランチは補完的な制度に留める ・ 家庭弁当以外となる場合の主な対応は「市販のパンやおにぎり」を購入することであり、成長期の中学生に適した昼食のあり方とは言いづらい。 ⇒利用しやすい制度、献立の充実 ・ 給食よりも家庭弁当のほうが残す生徒が少ない。 ⇒スクールランチは補完的な制度に留める ・ 家庭弁当を持参しにくい生徒に対しては教職員により「生徒にパンなどを持ってくるように指導している」、「教職員がパンなどを買いに行っている」などの対応が行われている。⇒事務手続きの軽減 	<p>2. 利用しやすい制度</p> <p>充実させるため、必要な時に利用できるように利用条件を緩和したり、注文や支払い方法を工夫して利用しやすい制度とする。</p>
3) 中学校昼食のあり方についての希望	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童・生徒は、「お弁当のほうがおいしいから」「メニューや量を調整できるから」「好きなものが食べられるから」を理由に家庭弁当を希望している。⇒献立の充実 ・ 保護者は、「栄養バランス」や「家庭弁当作りの負担軽減」を理由に小学校のような給食（全員喫食方式の完全給食）を希望している。⇒利用しやすい制度 献立の充実 	<p>3. 利用しやすい価格</p> <p>利用を増やすため、利用しやすい価格でスクールランチを提供する。</p>
4) スクールランチの充実について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者は現行のスクールランチの改善の方向性として、安価であることと注文や支払いなどが簡単に行えることなどを求めている。 ⇒利用しやすい価格、利用しやすい制度 ・ 教職員の間では支払いのトラブルや業務が増えるという意見があります。 ⇒事務手続きの軽減 ・ 改善された場合8割以上の保護者が利用意向を示しており、潜在需要が見込まれます。 	<p>4. 献立の充実</p> <p>充実させるため、おいしいこと、選択できるメニュー、量が調整できることなど、献立を充実させる。</p>
		<p>5. 事務手続きの軽減</p> <p>支払いのトラブルや事務手続きの負担が増加しないような制度とする。</p>

(3) 現行のスクールランチの充実に係る課題ごとの調査結果の整理および充実のポイント

調査結果を現行のスクールランチの充実に係る課題ごとに整理し、充実のポイントをまとめました。

課題	先進事例調査結果	充実のポイント
1. 周知方法の改善	<ul style="list-style-type: none"> 家庭教育学級での周知や試食会（鈴鹿市） 中学校入学説明会での保護者への説明（現在は文書のみ）（鈴鹿市・実施予定） 事業普及リーフレットの配布（「中学校昼食の実施状況に関する調査（平成 24 年 7 月）」大津市教育委員会スクールランチ推進室） スクールランチの日を設けクラス単位で食べる日を作り注文しやすい雰囲気づくり（「中学校昼食の実施状況に関する調査（平成 24 年 7 月）」大津市教育委員会スクールランチ推進室） 	<p>事業普及リーフレットや献立表の配布・試食会</p> <p>【スクールランチを知ってもらうための取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 導入しやすい取組として毎月の献立表の配布、中学校入学説明会での保護者への説明 <p>【スクールランチを注文してもらうための取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 将来的には保護者、生徒向けの試食会の実施
2. 利用しやすい制度	<ul style="list-style-type: none"> 家庭弁当とスクールランチを併用としながらも、家庭弁当を原則とせず家庭弁当とスクールランチを自由選択制とする（川崎市、鈴鹿市、大野城市） いずれの市においても、当日の朝の注文が可能 食券の購入による注文、支払い（大野城市） WEB 注文・決済システム（保護者の利便性が高いことに加え学校に代金を持ち込まずに注文、支払いの流れが完結することから教職員への負担も少ない）（川崎市） 	<p>利用条件の緩和と注文・支払い方法の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭弁当の持参が事情により難しい場合には積極的にスクールランチの利用を促進 利用をしやすいするためには、家庭弁当とスクールランチの選択制の導入を検討 注文や支払い方法の改善の検討
3. 利用しやすい価格	<ul style="list-style-type: none"> 290～400 円（川崎市） 300～450 円（横須賀市） 350 円（鈴鹿市） <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: auto; margin-right: auto;"> <p>【県内の状況】大津市：400円 守山市：500円 彦根市：320円</p> </div>	<p>利用率の確保と利用しやすい価格</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者の希望が多い 300 円台での斡旋
4. 献立の充実	<ul style="list-style-type: none"> メニューの工夫（川崎市） ホットメニューサービス（学校で食缶から直接温かいカレーなどを盛りつけて提供する方式・各校 2 回/年）（鈴鹿市） 例年 4 月が特に利用率が落ち込むため、ランチサービスを知っていただく機会として、イベント的に汁物の提供を検討中（鈴鹿市・検討中） 生徒考案メニューの採用（家庭科の授業で生徒たちが考えたメニューを実際に採用する。）（大野城市） ご飯の量の調整（大盛・並盛 2 種類のご飯の導入：1 月から）（大野城市） 個食デザート導入（12 月から）（大野城市） 	<p>栄養バランスの整ったメニューや量の調整</p> <p>【導入しやすい取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 魅力的な献立の提供のためのイベントの実施 <p>【将来的な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ご飯の量の調整や選択できるメニューの導入
5. 事務手続きの軽減	<ul style="list-style-type: none"> WEB 注文・決済システムを導入により学校の外で注文、支払いが完了する仕組みを作り、教職員が関わる場面を極力減らす（川崎市） 注文や支払いのための要員を新たにパート雇用し、配膳・下膳も注文した生徒が実施する（鈴鹿市） 	<p>負担が増加しない仕組みづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 注文や支払い、配膳、下膳の仕組みを作る

現行の中学校学校スーールランチの充実に向けて〔アンケート結果のまとめと課題〕【概要】

1 現行のスクールランチについて

- ・ 現行のスクールランチは、生徒・児童、保護者のいずれにおいても十分に認知されていない。
⇒周知方法の改善
- ・ 利用が少ない理由は、認知されていないこと、家庭弁当持参制度が定着していること、現行のスクールランチの注文・支払い制度などが面倒であることなどがあげられています。
⇒周知方法の改善 ⇒利用しやすい制度
- ・ 現行のスクールランチが中学生に受け入れられていない。
⇒献立の充実

2 中学校昼食の実態と予定

- ・ 家庭弁当持参制度は定着している。
⇒スクールランチは補完的な制度に留める
- ・ 家庭弁当を介した作り手と生徒の間にコミュニケーションが発生している。
⇒スクールランチは補完的な制度に留める
- ・ 家庭弁当以外となる場合の主な対応は「市販のパンやおにぎり」を購入することであり、成長期の中学生に適した昼食のあり方とは言いづらい。
⇒利用しやすい制度 ⇒献立の充実
- ・ 給食よりも家庭弁当のほうが残す生徒が少ない。
⇒スクールランチは補完的な制度に留める
- ・ 家庭弁当を持参しにくい生徒に対しては教職員により「生徒にパンなどを持ってくるように指導している」、「教職員がパンなどを買いに行っている」などの対応が行われている。
⇒事務手続きの軽減

スクールランチは補完的な制度に留める

周知方法の改善

利用しやすい制度

利用しやすい価格

献立の充実

事務手続きの軽減

3 中学校昼食のあり方についての希望

- ・ 児童・生徒は、「お弁当のほうがおいしいから」「メニューや量を調整できるから」「好きなものが食べられるから」を理由に家庭弁当を希望している。
⇒献立の充実
- ・ 保護者は、「栄養バランス」や「家庭弁当作りの負担軽減」を理由に小学校のような給食（全員喫食方式の完全給食）を希望している。
⇒利用しやすい制度 ⇒献立の充実

4 スクールランチの充実について

- ・ 保護者は現行のスクールランチの改善の方向性として、安価であることと注文や支払いなどが簡単に行えることなどを求めている。
⇒利用しやすい価格 ⇒利用しやすい制度
- ・ 教職員の間では支払いのトラブルや業務が増えるという意見があります。
⇒事務手続きの軽減
- ・ 改善された場合8割以上の保護者が利用意向を示しており、潜在需要が見込まれます。

周知方法の改善

児童・生徒、保護者がスクールランチを認知するように周知方法を改善する。

事業普及リーフレットや献立表の配布・試食会

【スクールランチを知ってもらうための取組】

- ・導入しやすい取組として毎月の献立表の配布、中学校入学説明会での保護者への説明

【スクールランチを注文してもらうための取組】

- ・将来的には保護者、生徒向けの試食会の実施

利用しやすい制度

充実させるため、必要な時に利用できるように利用条件を緩和したり、注文や支払い方法を工夫して利用しやすい制度とする。

利用条件の緩和と注文・支払い方法の改善

- ・家庭弁当の持参が事情により難しい場合には積極的にスクールランチの利用を促進
- ・利用をしやすいするためには、家庭弁当とスクールランチの選択性の導入を検討
- ・注文や支払い方法の改善の検討

現行の中学校スクールランチの充実に向けて

《改善・検討点》

利用しやすい価格

利用を増やすため、利用しやすい価格でスクールランチを提供する。

利用率の確保と利用しやすい価格

- ・保護者の希望が多い300円台での斡旋

献立の充実

充実させるため、おいしいこと、選択できるメニュー、量が調整できることなど、献立を充実させる。

栄養バランスの整ったメニューや量の調整

【導入しやすい取組】

- ・魅力的な献立の提供のためのイベントの実施

【将来的な取組】

- ・ご飯の量の調整や選択できるメニューの導入

事務手続きの軽減

支払いのトラブルや教職員への負担が増加しないような制度とする。

負担が増加しない仕組みづくり

- ・注文や支払い、配膳、下膳の仕組みを作る

スクールランチは補完的な制度に留める

